

(これからは私と茜ちゃんの二人で、お兄ちゃんの恋人になるんだ)
兄を独り占めできないことよりも、これからもまた三人一緒にいられることが嬉しい。

「な、なんだか……恥ずかしいです。あの、服、脱いでいいですか?」

「はあ? 普通、逆じゃないの?」

茜が呆れた声を出す。

「だってこの服……裸より恥ずかしいんだもん」

露出度の高いチャイナドレスを脱ごうとしたら、

「だめ。俺、このまま桜良を抱きたい」

「え、お、お兄ちゃん!?……きゃっ!」

その前に大和に押し倒されてしまった。大和の匂いがするベッドに、あお向けに寝かされる。

「なんだ兄貴、そういうエッチな服が好みなの?」

茜のからかいを無視して、大和が桜良の股間に顔を突っこんだ。反射的に脚を閉じるが、逆に大和の顔を秘所に押しつける格好になってしまう。

「あ、やだ……ああつ、はううっ!」

大和の舌が、期待で濡れた蜜壺をとらえる。指で肉羽をひろげられ、剥きだされた粘膜を温かい舌で舐められてしまう。

「ひゃっ、あつ、ダメです、そこ、汚いですから……あつ、やつ、やああつ！」

クリトリスはもう硬くしこつていて、簡単に包皮を剥かれてしまう。敏感な肉真珠を舌で舐められ、唇を押しつけて吸われては、もう桜良に抗^{あらが}う術^{すべ}はない。

「ああつ、イヤ、イッちゃう、イク、お豆、イクう！ ひいいっ！」

半身を起こし、股間に吸いつくようにして離れない兄の髪を手でかきむしる。軽い絶頂に、チャイナドレスをまとった巨乳義妹の身体がベッドの上でびくびくと跳ねる。「んふふー、アソコだけに気を取られていいのかなー？」

絶頂の余韻に呆けている桜良の背後に、いつの間にか茜が座っていた。背後から抱きかかえるように手をまわし、大きく開いた胸のスペースからやや強引に乳房を引っ張り出す。

「うわ、アンタのおっぱい、柔らかかつ！ しかもでかつ！ なによこれ、こんなのずるいつて！ なのに乳首も乳輪も小さいなんて不公平よっ！」

「あ、ああ……恥ずかしいよ……こんなの、恥ずかしいよおっ」

チャイナドレスの胸の開放部分から無理矢理引きずりだされた双^{ふた}つの乳房は、生地

に根元を圧迫されて不自然に歪ゆがんでいる。

「エロおい。ねえ兄貴、見てよ、これ。桜良のおっぱい、こんなになってるよ?」

茜にうながされて大和も顔をあげ、大きく前方に突きだした乳房を見る。

「いいなあ、桜良。あたしもこれくらいおつきければ、兄貴にパイズリしてあげられるのにな。ええい、悔しいな、もうっ」

「やつ、ダメ、ダメだよ茜ちゃん! そこいじらないで……ああ、乳首、コリコリいじめたらダメなお!」

兄に見られながら親友に乳房と乳首をいじられる恥辱に、桜良の顔が真っ赤に染まる。

(恥ずかしいよお、お兄ちゃんに見られてるのに……茜ちゃんにおっぱいいじられて気持ちよくなっちゃうよお)

同性故に知りつくした絶妙の力加減。茜の乳首はあつさりと限界まで突起させられてしまう。

「綺麗よ、桜良。女のあたしが見ても、羨ましいくらいに綺麗なピンク色……」

親友を嬲なぶって興奮したのだろう、茜の声が濡れている。ときおり耳たぶやうなじを這う温かいものは、茜の舌だった。



「ひうつ……はひゅっ」

乳首をつままれ、舌で舐められるたびに、桜良の口から喘ぎ声もれる。

「桜良、そろそろ挿れるぞ」

「は、はい……お兄ちゃんのそれ、欲しいです……」

大和が挿入しやすいように、桜良は自分から脚を左右に開いた。桜良の女陰はこれ以上なくらいに潤んでいて、いつでも大和を受け入れられる状態になっていた。

「んっ……熱、い……んあ、んああっ!!」

亀頭の先端が入るときに軽い抵抗があったが、あとは思っていたよりもすんなりと大和の分身を受け入れることができた。それだけ自分の秘肉が濡れて期待してたのだと、桜良は一人、頬を赤らめる。

「丸見えね、この体位だと。兄貴のチ×ポが桜良の可愛いオマ×コを犯してるところ、よく見えるわよ」

肩越しに茜が結合部を覗きこんでいる。桜良は半身を起こした体勢なので、確かに結合部は自分でもよく見えてしまう。兄の勃起を呑みこんでいる自分の女陰は、想像していた以上にグロテスクで、そして淫らだった。

（恥ずかしい……こんなイヤらしいところ、茜ちゃんにも……お兄ちゃんにも全部見

られてる……)

大和が徐々に腰をいだと、それにつれて媚肉も引きずりだされるようにして変形する。泡立った愛液がぐちゅぐちゅと恥ずかしい音を響かせるのも、桜良の羞恥心を煽った。

「へえ、桜良って汁が多いのね。それとも、あたしと兄貴に繋がってるところを見られていつもより感じてる？ こんなエッチなチャイナ服着て兄貴に突いてもらって、実はすごい気持ちいいんでしょ？」

「やだやだ、茜ちゃん、意地悪言わないで……アアッ、お兄ちゃん、それ、深すぎます……あはっ、はっ、あくうう！」

すでに二度精を放っている大和には余裕があるため、冷静に、そしてねちっこく桜良の感じるポイントを責めてくる。女の悦びを知った直後からずっと放置されていたせいかな、今までにないくらい女体は敏感だった。

「ダメ、そこ、そんなに擦ったら……あっ、あはっ、はああ！ やっ、熱い、熱いの、お兄ちゃんに擦られて、桜良、溶けちゃうのお！」

間近で見る親友の蕩け顔に、茜も興奮している。チャイナドレスから絞られたように飛びでた巨乳を両手で激しく揉まれてしまう。